

オープンイノベーションを実現する コミュニティの構築

松岡 東香*・木下 知己**

A New Challenge for Open Innovation by the Community Named “Tsukuba Society for Innovation”

Haruka MATSUOKA * and Tomoki KINOSHITA **

Abstract

Because of increasing competition and rapid technological change, university and industry are often compelled to collaborate for improving their resources, capabilities and knowledge. A number of universities are seeking financial support from industry because the costs of research have risen at a tremendous speed while conventional sources of funding have been systematically reduced. And many companies are seeking chances of cooperation with universities, academics, and research institutions for avoiding numerous risks at creating knowledge. Thus open innovation and the academia-industry-government collaboration had become to be considered vitally important recently. In this study, we focus the constructing of effective community for open innovation.

キーワード：オープンイノベーション、ビジネス・マッチング、オープンコミュニティ、産官学連携

はじめに

今日の経済の減速状況や競争環境の激化により、研究開発に投じる資金、人材、技術等の経営リソースはますます多岐化・複雑化する傾向にある。こうした環境下では、単に一組織の持つ技術を総動員する技術集約的な解決は困難になっており、Chesbrough (2003)¹⁾

などによって提唱されているオープンイノベーションへの取り組みが重要な経営課題となっている^{2,3)}。

オープンイノベーションへの取り組みは、産業界、官界、学界が連携を進める上でも有効な施策であり、産・官・学それぞれにとってのガイディングプリンシプルとして受容する価値のあるものである。

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

** 情報コミュニケーション学部情報メディア学科、Tsukuba Gakuin University

我々は、このオープンイノベーションを具現化するオープンなコミュニティを構築するべく「つくばイノベーション研究(www.tsukuba-society.org)」を発足し、オープンイノベーションを推進するコミュニティの構築について検証・検討を行った。

1. 「つくばイノベーション研究」の発足

「つくばイノベーション研究」は、成功・発展するビジネスのイノベーションメカニズムの解明と未来戦略立案を目指し、2008年5月に茨城県・茨城県つくば市・株式会社常陽産業研究所等の後援を受けて設立された(事務局は筑波学院大学内、木下・松岡研究室)。

活動初年度は、本コミュニティに一人でも多くの実務者が集えるよう筑波学院大学内に例会場を設け、オープンカレッジとして運営を行っている。

2. 「つくばイノベーション研究」の目的と特徴

本コミュニティの主な目的は以下の4点に集約される。

- 1) 最先端研究クラスター都市であり、世界有数のビジネス・イノベーション地区である「つくば」に情報受発信の拠点を置く。
- 2) 産官学連携における効果的ビジネス・マッチングの役割とあり方を探る。
- 3) ケーススタディからイノベーションの成功要因の解明とビジネスモデルの展開可能性を追求する。
- 4) 新たなビジネス・イノベーションの創出と事業化の方向性を検討する。

目的の遂行にあたり、既存の人的ネットワークだけでは解決できない、リソース的に一組織では担いきれない技術課題・経営課題に対して、従来の人的ネットワークを超えるオープンなコミュニティを形成し、特に人的巡り合わせによる「ビジネス・マッチング」を主眼としているのが大きな特徴である。

3. 研究領域

「つくばイノベーション研究」の対象研究領域を図1に示す。

図中に太矢印で示された多様なビジネス・マッチングの中に成功するマッチングを見出す

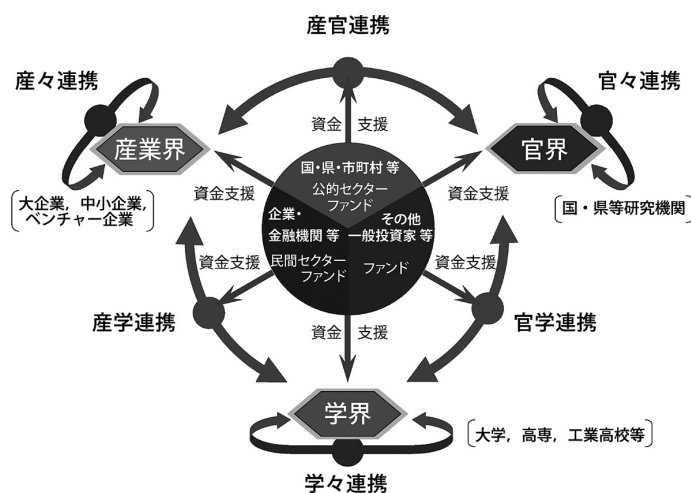


図1 「つくばイノベーション研究」の研究領域⁴⁾

すべく、活動や研究を重ねている。図中央に示した一般投資家・民間・公的セクターなどの幅広いファンドをステークホルダーとしながら、「産官連携」「官学連携」「産学連携」を軸に、「官々連携」「学々連携」「産々連携」をも扱う。

また、本コミュニティは、研究に従事している人間が企業の実務者との交流を通してマネジメントを学んで企業を興す、あるいは、企業にいる人間が大学に戻ってマネジメントや教育に従事するといった乗換えがスムーズにできるよう注力している。つまり、特定の分野や地域にこだわることなく、参加する企業や人にとって、新たなイノベーション創出に向かってステップアップするためのプラットフォームの役割を果たすことも目指している。

4. 研究メンバー

本コミュニティの目的は、最先端研究クラスター都市「つくば」を冠とし拠点を置き、産官学連携によるイノベーションをビジネス・マッチングにより具体化することにあるため、「来るもの拒まず」の精神で広く国内

外各地域各方面からの参加を求めている、主催するオープンカレッジをはじめ、情報交換会やメーリングリストへの参加者について、一切の制限を設けていない（図2）。

また、コミュニティ内には特別な階層を設けず、筑波学院大学のオープンカレッジとして開催される「講演会」（例会）、また、別途開催される「情報交換会」やネットコミュニティ（メーリングリスト、掲示板、SNS（Social Networking Service、準備中））参加者全員を「研究メンバー」（会員）として等しく位置付けているのも大きな特徴である。

具体的な研究メンバー像としては、当初、産業界・官界・学界の研究者と知的財産担当者、投資家や公的セクター等資金支援グループ、ビジネス・マッチングの役割を担うコーディネータ、新規事業開発へ挑戦意欲のあるイノベータ、インキュベータ等を想定していたが、さらにベンチャー企業家、県・市の産業政策担当者、大学院生など、実際の参加者は多岐に渡っており、参加者の相互作用やマッチングによる相乗効果に大きな期待が持てる。

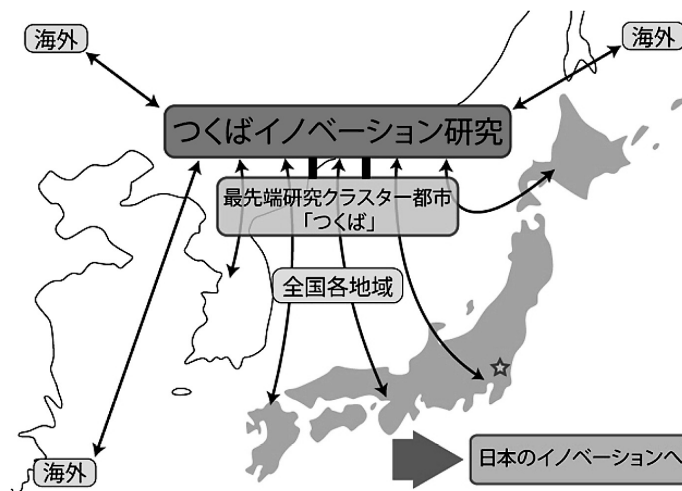


図2 「つくばイノベーション研究」の方向性と地域的拡がりの概念図⁴⁾

5. 活動内容

「つくばイノベーション研究」の主な活動を以下に示す。

1) オープンカレッジの開催

毎月第三水曜日に筑波学院大学にて開催しており、ゲストスピーカーによる基調講演や聴衆参加型のパネルディスカッションを実施している。基調講演には所属や分野を問わず多彩なスピーカーを招聘し、内容もビジネスの成功・発展事例に特化している。ゲストスピーカーと講演タイトルの一覧を表1に示す。

また、講演の聴衆であるオープンカレッジ参加者がゲストスピーカーに対し率直な質問やコメントを行うことができる場として、講演後には質疑応答の場を設けている。さらに、ゲストスピーカーを交えたパネルディスカッションを実施し、今後の展望や他分野との関連などについて議論を深めて建設的な結論を導き出し、学術的成果を得られるよう配慮している。この場においても、パネルディスカッションがスピーカーやパネラー間で閉じられることの無いよう配慮し、一般参加者も質問やコメントを自由に行える時間を設けており、毎回活発な意見交換が行われている。参

表1 ゲストスピーカーと講演タイトルの一覧 (2008年10月現在)

第1回 2008/5/28	「ロボットでつくばを元気に」 筑波大学システム情報工学研究科教授(兼)産学リエゾン共同研究センター長 油田信一 氏
第2回 2008/6/18	「がんばれ日本の製造業－日本の製造業は世界最強－」 政策研究大学院大学教授 橋本久義 氏
第3回 2008/7/16	「苦悩する我が国のバイオベンチャーの活路はココだ」 株式会社日経BP社医療局主任編集委員 宮田 満 氏
第4回 2008/9/17	「技術ベンチャー成功の秘訣」 イノベーションエンジン株式会社代表取締役 佐野睦典 氏
第5回 2008/10/16	「イノベーション（知的創造）のプラットフォーム」 財団法人常陽地域研究センター研究参与、埼玉大学地域共同研究センター客員教授 久野美和子 氏
第6回 2008/11/19 (予定)	「夢を形に－M&Aと世界展開－」 協立電機株式会社取締役社長 西 雅寛 氏
第7回 2008/12/17 (予定)	「地域再生の切り札はニーズ志向型の産官学連携だ」 茨城県工業技術センター長 藤沼良夫 氏
第8回 2009/2/18 (予定)	「東大の産学連携とイノベーション」 東京大学産学連携本部特任教授 堀 雅文 氏
第9回 2009/3/18 (予定)	「我が国の環境配慮型都市開発技術を世界へ」 株式会社日建設計代表取締役副社長 安 昌寿 氏
第10回 2009/4/15 (予定)	「断続的な経営改革－考え方のリストラ、MBOを使った経営改革－」 株式会社ポッカコーポレーション代表取締役社長 堀 雅寿 氏
第11回 2009/5/20 (予定)	「企業の知財戦略－知的財産の複雑系－」 株式会社リコー執行役員法務・知財本部長 海老 豊 氏

加者から寄せられる忌憚りの無いコメントは、様々な現場の生の声として重要なものであり、ビジネス・マッチングの具体化に関して欠くことのできない有用な情報をもたらしている。

2) 情報交換会の実施

通常、「講演会」の後に毎回開催している。ビジネス・マッチングの起点は「人」と「人」とのつながりであり、この「人」と「人」との無数の接点の中にビジネス・マッチングへと進化する種がやはりあり、具体的なビジネス・マッチングの創出には、この「情報交換会」が重要な役割を果たしている。

3) メーリングリストによる意見や情報の交換

オープンカレッジ参加者に加え、ゲストスピーカーやパネラーも登録しており、本コミュニティの重要な情報交換手段となっている。本メーリングリストでは、コミュニティの連絡事項だけでなく、オープンカレッジの感想やコメント、さらには企業の事業案内なども交わされるなど、コミュニティの活性化に大きく貢献している。「つくばイノベーション研究」では、将来役立つことやモノを参加者の文殊の智恵で見極め、産官学のビジネス・マッチングによりイノベーションを興すことを目的としていることから、このような場がイノベーションのための接着材の役割を果たせればと考えている。自由な意見や考え、独断と偏見、夢想幻想なんでも出し合い、マッシュアップを図る一つ的手段として、メーリングリストは重要な役割を担っている。

4) 公式サイトとマッチングコーナーの開設と運用

コミュニティの情報発信基地となる「つくばイノベーション研究」公式サイト(<http://www.tsukuba-society.org/>)⁵⁾と、ビジネス・マッチングを実現する掲示板を開設し、

運営している。

ホームページは本コミュニティの活動の軌跡や今後の予定が簡潔に分かるよう留意するとともに、頻繁に更新することでコミュニティ参加者の関心を集約する大きな基点となっている。

さらに、公式サイト内にはビジネス・マッチングを目的とした会員専用の掲示板を開設した。ビジネスとは、旬モノがタイミング良く出会い、引き合い、コラボレーションを興すことであるとの認識に基づき、本コーナーを「旬(しゅん)」と名付け運用を始めている。本掲示板はツリー構造になっており、ビジネス・マッチングを希望する「つくばイノベーション研究」の会員がその旨を投稿すれば、その記事に対し、簡単に返信メッセージを付けることができる仕様となっている。また、投稿時に「暗証キー」を入力しておくこと、その暗証キーを使って自分の記事を修正・削除することができる他、メールアドレスの入力時に「非表示」にチェックを入れておくことで、メールアドレスを(管理者以外に対し)非表示とすることができるなど、ユーザビリティとセキュリティに配慮している。なお、企業や研究機関がビジネス・パートナーを得るべく機密性の高い技術やノウハウの紹介を行う必要がある場合、掲示板という形式では不都合が生じる可能性があるため、会員と会員とをピンポイントで結ぶ新たな手段として、SNS(Social Networking Service)の導入に向け準備を進めている。

5) 研究成果の報告・公開

ホームページへの記事掲載、学会発表、そして学術論文の発表という形で実行する。オープンカレッジの実施報告は「つくばイノベーション研究」公式サイト⁵⁾にて随時行っており、講演やパネルディスカッションの要旨を掲載し、活動内容の紹介や情報の発信に努めている。

6. まとめ

オープンイノベーションを実現するべく、人的ネットワークに重点をおいたコミュニティを構築した。基調講演など、イベント形式の例会のみならず、ネットコミュニティにより参加者を結ぶことにより、人的交流の可能性を拡大するとともに、オープンコミュニティとして活性化した状態を保てるようになりつつある。セキュリティに配慮したビジネス・マッチングコーナーを設置したことなどにより、構成メンバーは産官学のそれぞれの背景を有するものではあるが、それぞれの組織としての関与では無く、志だけで緩く繋がっているにもかかわらず、産官学連携活動をベースに実効的な成果をあげることが期待できる。

参考文献

- 1) Chesbrough H.W. (2003), *Open Innovation*, Harvard Business School Press.
- 2) Christensen C., Raynor M.E. (2003), *The Innovator's Solution, Creating and Sustaining Successful Growth*, Harvard Business School Publishing.
- 3) Foster R.N., Kaplan S. (2001), *Creative Destruction-Why Companies That Are Built to Last Underperform the Market and How to Successfully Transform Them*, McKinsey and Co., Inc.
- 4) 松岡東香、石田 賢、久保田時治、氷鉋揚四郎、山崎宏之、木下知己 (2008)、新しいイノベーションを目指したビジネス・マッチングによる「つくばイノベーション研究」の展開、研究・技術計画学会、第23回年次学術大会（予稿集 CD-ROM）、D2017、p1-4.
- 5) 「つくばイノベーション研究」公式サイト (<http://www.tsukuba-society.org/>) [accessed on Oct 17, 2008].